

市民プレス

2016年
(平成28年)
1月5日
第71号

発行人 「市民フォーラム」
編集人 原 昭二
制作 デジタル工房
TEL 090(3048)5502
〒353-0004
埼玉県志木市本町2-4-3

E-mail
hara@camelianet.com



市民の目線で市民が発信する地域情報紙
WEB SHIMIN
http://shimin.camelianet.com
「市民プレス」電子版(無料)を公開しました
http://pr-shimin.camelianet.com
電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。

CONTENTS

- PAGE 1
足利政権の衰退
山内、扇谷両上杉氏の争い
後北条氏三代
長享の乱は・・・
- PAGE 2
北条早雲は小田原城を奪う
早雲は三河国に侵攻する
古河公方と山内上杉氏との提携
- PAGE 3
都で勃発した「永正の錯乱」は
氏綱が家督を相続して 上総・安房国の内訌
- PAGE 4
北条氏康が勘を継ぐ 河越城の攻防
河越夜戦は・・・

足利政権の衰退

山内、扇谷両上杉氏の争い 後北条氏三代

武蔵国鉢形城から一千騎をもって
発進し、定正の本拠だった糟谷館
を制圧しようとした。定正は留守
を弟の朝昌(定正の養子、朝良の実父)
に任せ、武蔵の河越城に滞在して
いたが、直ちに二百騎でこれを追
跡し、頼定軍を糟谷館郊外の実時
原(現・神奈川県伊勢原市)で奇襲した。
太田道灌が暗殺されて・・・

山内上杉家の頼定(関東管領)と
扇谷上杉家の定正との間の争い
で、長享元年(1480)に始まった。
文明十八年(1486)の七月、相
模国糟谷館(現・神奈川県伊勢原市)
の上杉定正の許で、その配下に
よって謀殺された後、道灌の嫡男
資康は江戸城に戻って家督を継承
したが、定正が江戸城を占領して
彼を放逐する(江戸城の乱)。

歴史を紐解く

頼定は三度も敗れた・・・

扇谷上杉家の家中では・・・
信望が高かった道灌が誅殺され
たことは、扇谷上杉家中に動揺を
もたらした。定正の実兄で相模三
浦氏の当主だった高教が、定正に
代わろうと図ったため、先代の当
主で養父に当たる三浦時高から追放
されるといふ事件が発生する。

戦乱の発端は・・・

翌長享元年(1480)、頼定と実兄
の定昌(越後守護)は、扇谷上杉家
と結んでいた長尾景人の弟、房清
を討ち、下野国足利庄勸農城(現・
栃木県足利市)を奪った。ここに両
上杉家の戦いは勃発した。

定正の本拠を襲ったが・・・

頼定は実父(越後守護上杉房定)の
支援を受けて、長享二年二月、太
田道灌の謀殺後の軍民の離反は
田資康や三浦高教とともに本拠の



「長享三戦」の図

は後方に越後・上野国両国を有し
ていたので、その支援によって鉢
形城を保ち続けた。
堀越公方、政知の活動
去る文明十四年の年末、山内、
扇谷両上杉氏と古河公方との和解
(都部合休)が成立したので、堀越
公方の支配圏は伊豆一国のみに押
し込められた。公方の政知は方向
転換を図り、長享元年に、次男の
清晃(後に十一代将軍義澄)を上洛さ
せて、将軍義政と対立していた
政と対面させ
義政の弟で、義尚と対立していた
義視も、政知(義政、義視の兄となる)
が亡くなる直前の延徳三年一月に
死亡し、将軍家は総崩れとなった。

堀越公方家内の紛争が起こる

政知の嫡男、茶々丸は、つづく
二人の子、清晃と潤童子(母親は武
小路隆光の娘の円満院)に対して異
母兄となり、素行不良の廉で、父
親の命により軟禁された。さらに、
弟の潤童子が世子(世嗣ぎ)に指名
されたため、茶々丸は、これを恨
んでいた。

延徳三年(1481)四月、政知が

病いに倒れて死亡すると、牢番を
殺して脱獄した茶々丸は、弟の潤
童子とその母親を殺害し、事実上
の堀越公方となる。
将軍義政と弟の義視も亡くなる
遡って、その前々年の長享三年
三月、将軍義政の子で後継者と
なった義尚が陣中で病死、翌、延
徳二年(1480)一月には、東山の
銀閣が完成するのを待たずして義
政が死去した享年五十五才。また、
義政の弟で、義尚と対立していた
義視も、政知(義政、義視の兄となる)
が亡くなる直前の延徳三年一月に
死亡し、将軍家は総崩れとなった。

「伊豆国の兵士の多くが山内上

杉家に動員されて上野国の合戦に
出陣したため、手薄になったこと
を好機と捉え、早雲の手勢と今川
家の当主、氏親に頼んで借りた人
を合わせた五百人が、十艘の船で
清水浦を出港した。駿河湾を渡っ
て西伊豆の海岸に上陸し(次頁の地
図を参照)、早雲の兵は一挙に堀越
御所を急襲して火を放ち、茶々丸
は山中に逃げて自害に追い込まれ
た」と書かれている。但し、最
近の検証では、追放されたが、生
き延びたともいわれたという。

「伊勢新九郎」とはどんな人?

出自には不明な部分が多く、生
れた年についても二説があった。
一方、義材は、ようやく近年になつて、室町幕府
の政所執事を務めた伊勢氏の出身
とする説が有力となる。「伊勢新

九郎盛時」の名は文明十三年(1480)から文書に現われ、文明十五年、九代将軍義尚の申次衆(将軍に取次ぐ役)に任命されたという。長享元年(1480)には奉公衆(幕府の武官)となり、幕府に出仕している間に、建仁寺と大徳寺で禅を学んだ。文明八年に始めて駿河に向かい、新九郎の姉(又は妹)が駿河の守護、今川義忠の正室(北川殿と呼ばれる)となっていたが、文明八年(1480)、義忠が不慮の死を遂げたためお家騒動が勃発する。嫡男の龍王丸はまだ幼少だったので、家臣らが父義忠の従兄弟の小鹿範満を擁立したため争いとなった。龍王丸が成人しても範満は家督を返そうとせず、家督奪取の動きを見せ、龍王丸を圧迫した。文明十九年(1486)、北川殿と龍王丸は京都で九代将軍義尚に仕えていた伊勢新九郎に助けを求めたので、新九郎は駿河へ下向し、石脇城(現・静岡県焼津市)を拠点に兵を集めて駿河館を襲撃、範満を殺害した。大森氏頼の妻は三浦時高の姉妹なので、義兄弟となる。大森家の家督は次男が継いだ、三浦家は、養子縁組の後に実子が生まれ、養子の高教(上杉持朝の次男、定正の兄)と仲違いし、その子、義同とともに追放する。しかし義同は・・・

今川氏客將の伊豆討ち入り
権力の座に就いた清晃(還俗して
義澄といひ、さらに義高、義澄に、なお
正式な就任は翌年)は、母と弟・潤
童子の敵討ちを、茶々丸の近隣に
城を持つ、駿河今川氏の客將(きや
くしょう、とも、客分の將)、伊勢新
九郎(興国寺城々主)に命じた。そ
の年、夏か秋頃、新九郎は命を奉
じて伊豆に侵攻し、堀越公方から
鎌倉公方の系譜を引く古河公方の
同国を奪う。堀越公方は滅亡して、
兵を集めて駿河館を襲撃、範満を
殺害した。

龍王丸は元服して氏親(「氏」の
字は本家・足利氏の通字)代々継承す
るに由来)と名乗り、今川家の当
主となつて、新九郎には富士下方
十二郷と興国寺城が与えられた。
このことが、新九郎にとつて、伊
豆、相模に進出する機縁となった。

大森氏の支援を受けて三崎城を
攻め、三浦家の当主の座と相模守
護代職を手に入れたという。ただ
し、軍事的な内覧を否定し、時高
の死後の混乱に乗じて三浦氏に復
帰、家督を奪ったとする説もある。
上杉定正が戦場で死亡する
その年の十月、上杉定正は、鉢
形城の上杉頼定を討つために北条
早雲の援軍を仰ぐ。再び高見原に
出陣して頼定と対陣したが、荒川
を渡河しようとして落馬、死亡す
る。享年四十九才だった。



北条早雲像 (早雲寺蔵)

早雲庵宗瑞と名乗る
新九郎は出家して法名の「早雲
庵宗瑞」となる。その時期は確か
ではないが、延徳三年(1481)こ

定正に大森氏頼、三浦時高を加えた三将の喪失は、扇谷家にとって大きな痛手となった。扇谷上杉家は定正の甥の朝良が養子となつて継承したが、戦況は大きく変化する。関東管領、山内上杉家の実力は扇谷上杉家を格段に上回り、古河公方の足利成氏は一転して上杉頼定側に支持を変える。また、

太田道灌の嫡男、資康は...

家督を継いで間もなく、定正の追っ手に攻められて江戸城を追われ、甲斐国に逃れたが、長享の乱が勃発すると、三浦高救(定正に追われていたが、実は定正の実兄)とともに頼定の軍に加わる。

これが機縁となつて、資康は三浦高救の孫を妻とした。定正が死亡して、資康は扇谷上杉家への復帰が許される。新当主の朝良に仕え、菅谷城(現・埼玉県嵐山町)に移る(のち永正二年1495のころ江戸城に帰還する)。

北条早雲は小田原城を奪う

明応四年(1495)、北条早雲は足利茶々丸の探索・討伐を名目として、甲斐国に出兵し、守護武田信繩と戦う。また早雲は、大森氏頼の後を継いだ城主の藤頼から小田原城を奪ったという。但し、事件の年次については、翌年の明応五年以降ともいわれ、確かではない。

早雲は三河国に侵入する

明応十年(1501)、今川家の武将として、隣国、三河の安祥城(現・愛知県安城市)を攻める。城主は松平長親(徳川家康の高祖父)だった。しかし、敗北して失敗に終わる。

管領上杉頼定は上戸陣に

明応五年(1496)、軍勢を率いて相模国に攻め入り、七月、早雲の弟・伊勢弥二郎が立て籠っていた小田原城を落とす。この戦いで相

模国西部を押さえ、さらに武蔵国河越に入つて、定正の跡を継いだ上杉朝良に対して軍を進める。

成氏が死去、政氏が古河公方に

明応六年九月、古河公方の足利成氏が六十四才で死去、臨終のとき、嫡子の政氏を呼び、「再び鎌倉に帰還して関八州を取り戻すことが孝行である」と言い残したという。政氏はすでに延徳元年(1488)譲位されて家督を相続し、父と同様に將軍義政から偏諱を受けて政氏と名乗った。

同年、早雲の軍勢は伊豆の南端に在った深根城を討ち、匿われた茶々丸はここで自刃した、とも伝えられる。但し茶々丸の最期については、諸説があつて明らかではない。

明応の大地震に襲われる

翌、明応七年八月、南海トラフ(四国の南の海底のトラフ溝のこと)に沿った巨大な地震が発生し、津波が襲つて多くの死者が出た、と古文書に記述されている。

早雲は伊豆に討ち入り

明応十年(1501)、今川家の武将として、隣国、三河の安祥城(現・愛知県安城市)を攻める。城主は松平長親(徳川家康の高祖父)だった。しかし、敗北して失敗に終わる。

「立河原の戦い」は...

永正元年(1504)九月、武蔵国立河原(たちかわの原)とも読む、現・東京都立川市)で、上杉頼定・足利政氏らの連合軍と上杉朝良・今川氏親・北条早雲らの連合軍との間で行われた大規模な合戦だった。長

享の乱の事実上の決戦でもあつた。享徳の乱を通じて勢力を伸ばした扇谷上杉家と、上杉氏の宗家として代々関東管領を継いできた山内上杉家との間で繰り広げられた長享の乱は、扇谷上杉家の当主、定正が健在のときは互角の戦いを続けてきた。しかし、定正の死後、山内上杉家当主の頼定の反撃と、第三勢力としての古河公方・足利政氏と頼定との同盟によつて、扇谷上杉家は苦境に立たされた。

扇谷上杉家の新当主の朝良は...

同家家臣の大森氏が拠る小田原城を奪つた、北条早雲の拳を容認し、軍事支援を要請した。早雲は駿河守護、今川氏当主・氏親の後見人的な存在だったので、北条・今川軍の支援が期待できる。

朝良は再び勢力を回復して、戦況は一進一退を繰り返す。一方、頼定は上戸陣に釘付けとなる

合戦で多くの戦死者を出す

河越城を守つていた扇谷上杉(朝良)は今川軍に合流し、北条軍も加わつて多摩川を渡河、立河原に上陸した。これを知つた山内上杉(頼定)・古河公方連合軍は、九月二十七日の辰の刻(朝八時頃)、立河原に駆けつける。正午頃から合戦が始まり、戦いは夕方まで続い

北条早雲は伊豆に討ち入り、

ついで相模を平定する

古河公方と山内上杉氏との提携の再構築を図り、両上杉の和解後、翌永正三年、古河公方・政氏の弟の頼実(成氏の次男)を養子として迎え入れる。ところがすでに頼定は、同じ山内上杉の名門から出た憲房を養子としていたので、家督の後継は不安定だった。

山内上杉側は苦戦を強いられ、ついに潰走する。この戦いで山内上杉軍は、当時の戦いでは稀なる二千人もの戦死者を出す。また、多くの諸将を失つた。頼定は本拠地のあつた北武蔵の鉢形城に命からがら逃げ去つた。

大敗の後の頼定が再び挑戦...

頼定と合流するために、越後では主君・上杉房能の命を受けた越後守護代・長尾能景は、出陣の準備を進めていたが、立河原での頼定大敗の報を聞いて鉢形城に入った。

能景は頼定に対して、朝良が兵を休めている今こそ好機であると力説して出陣を説いたので、越後軍が主力を占める頼定・能景連合軍は十一月、突如河越城を攻撃する。

兵を休ませ、時期をみて頼定を

討つ算段をしていた朝良は十二月、上戸で衝突したが、能景は朝良恐れるに足りずと見るや、その勢いで頼田城(現・東京都八王子市)を取り囲み、翌日には扇谷上杉方の城主・長井直直を討ち取つて山内上杉方の三田氏宗を城主にすると、続いて実田城(現・神奈川県平塚市)を攻め落とすとして扇谷上杉の相模守護代上田正忠を捕虜にした。こうして扇谷上杉領と今川・北条領は遮断されたのである。

翌永正二年(1505)に入ると、再

び頼定・能景の軍勢は河越城を包囲し、これに抗する術がなかった上杉朝良は、三月に降伏を表明したので、長享の乱はここに終結した。

古河公方と山内上杉氏との提携

頼定は古河公方・関東管領体制の再構築を図り、両上杉の和解後、翌永正三年、古河公方・政氏の弟の頼実(成氏の次男)を養子として迎え入れる。ところがすでに頼定は、同じ山内上杉の名門から出た憲房を養子としていたので、家督の後継は不安定だった。



北条早雲は伊豆に討ち入り、ついで相模を平定する (一部のデータは軍記物による)

長享の乱

西暦	元号	主な出来事
1485	文明17年	江戸城に詩僧・万里集九が招かれる。十二月、山城国・掾による自治支配
1486	文明18年	太田道灌が相模糟屋館に招かれて謀殺される。巡歴の高僧・道興准后が武蔵国を訪れる
1487	長享元年	伊勢新九郎が伊豆に下向、興国寺城主となる
1488	長享2年	万里集九は江戸を離れて越後に向かう。「長享の三戦」で山内、扇谷上杉氏が激突する
1489	延徳元年	義尚、近江鈎の陣中で病死
1490	延徳2年	足利義政が死去
1491	延徳3年	一月、足利義親が死没。四月、公方の政知死す。八月、義材は近江に出陣して六角高頼を追放する
1492	明応元年	明応の政変(細川政元が將軍を廢立する)
1493	明応2年	北条早雲が伊豆に討ち入り
1494	明応3年	扇谷上杉朝良が河越城に入つて家督を継ぐ。定正、山内頼定と対陣するが落馬により死去
1495	明応4年	早雲が小田原城を奪う
1496	明応5年	日野富子が死去する
1497	明応6年	北条早雲は伊豆を平定する
1498	明応7年	明応の大地震
1499	明応8年	早雲は三河に出兵する
1500	明応9年	立河原の戦い
1501	文亀元年	山内上杉頼定は河越城を包囲して扇谷上杉朝良を降伏させる
1502	文亀2年	山内上杉と扇谷上杉両家の同盟が復活する
1503	文亀3年	永正の錯乱
1504	永正元年	前將軍の義材が大内義興・細川高国とともに入京。將軍足利義澄は逃亡して義材が將軍復辟
1505	永正2年	北条早雲は武蔵に出兵して江戸城に迫る
1506	永正3年	
1507	永正4年	
1508	永正5年	
1509	永正6年	
1510	永正7年	
1511	永正8年	
1512	永正9年	
1513	永正10年	
1514	永正11年	

足利義植
義材は義植に改名

足利義澄
前將軍の義材が大内義興・細川高国とともに入京。將軍足利義澄は逃亡して義材が將軍復辟

足利義材
義材は近江に出陣して六角高頼を追放する

足利義尚
義尚、近江鈎の陣中で病死

永正四年、顕定の養子、上杉憲房と朝良の妹の婚姻が成立して山内・扇谷両家の同盟関係が復活する。

都で勃発した「永正の錯乱」は

細川政元の暗殺を発端とする幕府管領細川氏の内訌である。前述したように、明応の政変で専制権力を樹立した政元であったが、実子はおらず、兄弟もいなかった。そのため京兆家(細川一門本宗家)では、関白・九条政基の末子の澄之、細川一門の阿波守護家から澄元、さらに京兆家・分家の野州家から高国の三人を迎えて養子にした。

分烈抗争の芽をもった細川家では、永正四年(1507)六月、政元が、澄之を擁する内衆(家臣)の謀略で殺害された(細川殿の変)。細川氏は幕府の権力を掌握していたため、將軍職をめぐる抗争も絡んで、畿内は長い対立抗争の状態に突入した(河内川の乱)。

十二代將軍義澄は・・・
明応の政変(明応二年=1503)によって擁立されたが、実権は細川政元や富子、伊勢貞宗らに握られていた。成長した義澄は、自ら政務を行おうとしたが、政元と対立する。永正四年に政元が暗殺されたが、翌年、前將軍・義尹(義材より改名)を再び擁立する情勢になると、近江国の六角高頼を頼って都から逃れる。

義尹が十代將軍として復帰する
幽閉されたのち、諸国に下向していた十代將軍・義材(義尹)は、永正五年四月、周防国の大内義興の軍事力に支えられ上洛する。細川家の高国らに迎えられる。六月、京都を占領し、七月には將軍職に返り咲く(永正十年に義植と改名)。

関東の平和は突然破られる
山内・扇谷両家の婚姻が成立した直後、顕定の片腕ともいえる弟の越後守護上杉房能が、守護代長尾

為景(上杉謙信の父)らが擁する上条定実軍に追われて自害した。これに激怒した顕定は、永正六年、長尾為景を討伐する兵を挙げ、越後に進軍する。

顕定は出発に先立って上杉朝良と

会談して誓書を交わしている。すると、その留守を狙って旧領のある上野に戻っていた長尾景春が再び反乱を起こし、更に北条早雲が突如扇谷上杉家との同盟を破棄して相模中部への侵攻を開始した。八月、隙をついて早雲は江戸城に迫る。上野に出陣していた朝良は反撃に出て、翌年まで早雲と武蔵、相模で戦う。

関東管領、古河公方を巡って

永正七年、上杉顕定が定実・為景軍の返り討ちにあつて戦死すると、遺された二人の養子(顕実と憲房)が次期関東管領を巡って内紛となる。さらに古河公方家では、顕実を支援しようとした足利政氏とこれに消極的な嫡男の高基(元服して高氏と名乗ったが、改めて)が対立、またその弟の義明(下総國小弓城を本拠として「小弓公方」となる)まで加えて、公方の地位を巡る内紛が発生した(二連の戦いを総称して「永正の乱」と呼ぶ)。上杉朝良は山内上杉家と古河公方家の内紛を收拾しようとして奔走する。

権現山城では・・・
扇谷上杉の家臣で、山内上杉領だった神奈川湊を支配下にしていた上野政盛は、長享の乱でこの地を奪われた。これを恨んだ政盛は、権現山城(現・横浜市)で挙兵する。永正七年七月、上杉両家の朝良、憲房が権現山城を包囲すると政盛は激しく抵抗した。援軍として駆けつけた北条早雲も政盛に撃破され、だが、ついに落城する。

さらに相模三浦氏の当主の義同は、早雲が相模に向かつて進出すると対立する立場となつて、小田原城の早雲を攻める。すると逆に早雲は相模の岡崎城を攻撃する。

旧將軍派と復帰將軍派との争い
永正八年(1502)八月、將軍に返り咲いた義尹を支援する細川高国・大内義興と、前將軍の義澄を支援する細川澄元との間の争いは、幕府の政権と細川氏の家督をめぐる戦い(山城国船岡山の船岡山合戦)となり、高国・義興連合軍が勝利した。同年八月、復帰を目指していた前將軍の義澄は、決戦の直前に病死した(享年三十二才)。

早雲は相模への攻勢を強める
永正九年(1503)、早雲は岡崎城(現・伊勢崎)・住吉城(現・逗子市)を攻略し、三浦義同、義意父子を三崎城(新井城ともいう)に追い込む。さらに三浦氏を攻略するため、玉縄城(現・鎌倉市)を築く。

模国の寺社造営の事業を活発化し、「相州太守」を名乗った。

大永三年(1503)、伊勢氏から北

条氏への改姓を行う。これは、鎌倉幕府執権北条氏が相模守・武蔵守を歴任した事実によって、両国の支配を正当化するためだったようだ。

江戸城を攻略したが・・・

氏綱は、山内・扇谷両上杉氏の勢力圏だった武蔵国に進出し、翌四年には太田資高を寝返らせて、城主の扇谷・上杉朝興(叔父の朝良の養子、すなわち朝昌の孫)の江戸城を攻略する。岩付、蔵城を落とし、毛呂城主を味方に取り込む。しかし、態勢を立て直した朝興は・・・

逆襲に転じて奪い返す・・・

大永五年、氏綱は、岩付城(現・さいたま市岩槻区)などの武蔵の諸城を失う。さらに朝興は山内上杉家、古河公方、甲斐の武田氏とも手を結び、また早雲の時代には友好な関係にあつた上総の真里谷武田氏、小弓公方、安房の里見氏にも呼び掛けて、氏綱を包囲した。

鶴岡八幡宮の戦いが勃発する

翌、大永六年(1506)、北条氏の脅威を感じていた安房の里見氏は、数百隻の船を連ね、三浦半島から鎌倉に向かって侵攻した(「里見軍記」、『北条記』)。鎌倉に近い北条氏の居城、玉縄城を脅かす意図があつたようだ。戦いは鎌倉市中に移り、乱戦となる。里見軍は鶴岡八幡宮の社殿に入つて宝物を奪い、破壊したが、合戦中に出火して炎上した。北条勢は玉縄城に向かったが、城を守る北条氏時(氏綱の弟)はこれを撃退し、北条氏は三浦半島帯を防衛した。

上総・安房国の内訌

敵方陣営に侵攻しても奪回され、四面楚歌に陥つた氏綱は、幸いにも敵方陣営の内紛によって救われる。天文二年(1503)、里見氏で内訌が起こり、当主の義豊が叔父の実亮

今川氏との抗争へ

河東の乱(天文五年〜同十四年=1505)が駿河国で起こった。今川氏と相模国の北条氏との戦いで、「河東」は争奪の対象となつた富士川以東の地域をいう。駿河の守護大名・今川氏と、相模の新興・戦国大名の北条氏は、駿河同盟を結んで甲斐の武田氏と抗争していた。しかし、今川氏側では若くして九代当主・氏親の跡を継いだ氏輝が武田と和

らを肅清した(稲村の変)。氏綱は実亮の遺児・義堯を援助して義豊を殺害させ、義堯は家督を奪つたので、里見氏は包囲網から脱落する。また、小弓公方を擁立する真里谷武田氏でも内紛が起き、小弓公方の勢力は弱まった。

領国の拡大、甲斐・駿河に出兵

関東に勢力を拡大する一方、父・早雲の代から形式的に主従の関係にあつた駿河の今川氏との同盟に基づいて、甲斐の武田信虎と甲州・相州の国境で相争う。天文四年(1505)には今川家当主・氏輝の要請によって甲斐都留郡に出陣、山中の戦いで武田信虎の弟・信友を討ち取る。

翌、天文五年、今川氏輝が急死する

と家督を巡つてお家騒動(花倉の乱)が起こると、氏輝に実子がいなかったため、岳承芳を支持した。承芳は今川義元として家督を相続すると、翌年、武田信虎の娘定恵院を娶つて甲駿同盟を成立させる。氏綱はこれに激怒して相駿同盟が破綻、今川氏との抗争が勃発した(河東の乱)。後北条軍は駿河国の河東地方(富士川以東)に侵攻して、今川氏との主従関係を完全に解消して独立を果たした。

天文六年(1506)、扇谷上杉氏の朝興が本拠の河越城で病死する。朝興は叔父・朝良の養子だが、過ぐる天文元年、朝良の意向に叛いて自らの実子、朝定を後継者として指名していたので、若年の朝定が跡を継ぐ。これを好機とみた氏綱は武蔵に出陣して河越城を陥れ、三男の為昌を城代に置いた。

氏綱は甲斐・駿河に侵攻する。扇谷上杉・朝興が死去、朝定が跡を継ぐ。氏綱は河越城を攻略する。氏綱は第一次国府台合戦で勝利、下総国を支配下に

天文八年、国府台第一次合戦、葛西城を最前線として
天文十年、北条氏綱、病んで死去する

鶴岡八幡宮の工事が落成する

西暦	元号	主な出来事
1515	永正12年	北条早雲は相模三浦氏を滅ぼす(相模を平定)
1516	永正13年	北条早雲は家督を嫡男の氏綱に譲る
1517	永正14年	北条早雲、葦山城で死去する
1518	永正15年	
1519	永正16年	
1520	永正17年	
1521	大永元年	
1522	大永2年	
1523	大永3年	
1524	大永4年	
1525	大永5年	
1526	大永6年	
1527	大永7年	
1528	享祿元年	
1529	享祿2年	
1530	享祿3年	
1531	享祿4年	
1532	天文元年	
1533	天文2年	
1534	天文3年	
1535	天文4年	
1536	天文5年	
1537	天文6年	
1538	天文7年	
1539	天文8年	
1540	天文9年	
1541	天文10年	
1542	天文11年	
1543	天文12年	
1544	天文13年	

足利義晴

足利義植

睦する。さらに後継者争い(花倉の乱)を制して、天文五年に当主となった氏輝の弟、義元は翌天文六年二月に甲斐国守護武田信虎の娘、定恵院を正室に迎え、甲斐同盟は強化された。

駿相同盟は破綻した？

北条氏は甲相国境で武田方と抗争していたので、甲斐の同盟を駿相同盟の破綻と看做した北条当主の氏綱は、二月下旬、駿河に侵攻する。義元は出陣して氏綱の軍勢と争ったが、氏綱は河東を占拠した(第二次河東の乱)。

房総の支配を目指して

氏綱は、天文七年(1538)、下総国に進出するための拠点となつていた葛西城(現・東京都葛飾区)を攻略し、房総への足掛かりにする。



北条氏綱像 (早雲寺蔵)

鶴岡八幡宮の造営

後北条氏の房総進出は、小弓公方と対立する古河公方の利害と一致するもので、小弓公方の足利義明が古河・関宿への攻撃を画策すると、古河公方の足利晴氏は氏綱・氏康父子に対し「小弓御退治」を命じた。国府台の合戦で勝利...

同年十月、氏綱は小弓公方・足利義明と安房の里見義堯らの連合軍と戦う(第二次国府台合戦)。

氏綱・氏康父子は足利・里見連合軍に打ち勝つて、義明を討ち取る。小弓公方は滅失し、武蔵南部から下総に向けて勢力を拡大した。

古河公方と結んだ氏綱は...

古河公方の足利晴氏から合戦の勝利を賞して関東管領に補任されたという(伊佐早文書)。関東管領の補任は幕府の権限なので、正式なものとはなり得ないが、当時の管領は山内上杉氏憲房の子、憲政だったので、古河公方を奉ずる氏綱・氏康は、東国の伝統勢力に対抗する政治的な地位を得た。天文八年、氏綱は娘(芳春院)を晴氏に嫁がせて古河公方との連帯を強め、足利氏・御一家の身分をも獲得した。

氏綱の支城体制が確立する。小田原城を本城に伊豆の葦山城、相模の玉縄城、三崎城(新井城)、武蔵の小机城、江戸城、河越城が支城となり、各地域の拠点となる。支城には重臣や一門を置き、そのうち玉縄城主となった三男・為昌は後に河越城主も兼ねて広大な領域を管轄し、嫡男・氏康に匹敵する重要な地位を占めるようになった。

氏綱は、築城や寺社造営のために積極的に職人集団を集め、商人・職人に対する統制を行う。

領国拡大以外の大事業として、鎌倉鶴岡八幡宮(現・神奈川県鎌倉市)の造営がある。既述したように、鶴岡八幡宮は大永六年(1526)、戦いで焼失した。造営事業は天文元年(1532)から始まり、興福寺の番匠(大工)を呼び寄せて翌年から工事が着手された。氏綱は関東の諸領主に奉加を求めたが、両上杉氏はこれを拒否する。天文九年に上宮正殿が完成、氏綱ら北条門臨席のもとに盛大な落慶式が催された。

ただし、この造営事業は氏綱の没後まで続いて完成は氏康の代の天文十三年(1544)となる。源頼朝以来、武門の守護神たる鶴岡八幡宮の再興を主導することは、執権北条氏や鎌倉公方という東国武家政権の後継者の立場を主張する意味を持っていた。

氏綱は死去する

氏綱に敗れた扇谷上杉朝定は、山内上杉家の上杉憲政と手を結んで反攻の兆しを見せ、さらに今川軍との戦いも長期化する形勢の中で、天文十年(1541)に病に倒れて死去した。享年五十五才だった。

北条氏康が跡を継ぐ

嫡男の北条氏康は第三代の当主となる。氏綱は若い氏康の器量を心配して、死の直前、氏康に対して五か条の訓戒状を伝えている。氏康はすでに... 享徳三年、十六才の初陣で戦い、武蔵の上杉朝興勢に対して勝利した(小沢原の戦い)。天文六年(1537)、二十三才、敵対していた甲斐の武田氏が、駿河の今川義元と婚姻によって同盟を結んだので、その年二月、氏綱と共に駿河に侵攻し、駿河東部の河東地域を支配下に置いた(第一次河東一乱)。

河越城、国府台の戦いで

同年七月、氏康は河越城の攻略などに出陣して戦功を重ね、翌年の国府台の戦いでは、父と共に戦って打ち勝つ。同年同月、父子で鎌倉鶴岡八幡宮に社領を寄進、同年將軍足利義晴から奥鶴岡(奥鷹とも、狩猟用の鷹の雛)を贈られている。

甲相同盟が成立

一方、甲斐では天文十年、武田信虎が駿河に追放され、嫡男の晴信(信玄)が当主として信濃への侵攻を開始する。相模でも氏綱が死去し、家督を継承した氏康は、河東地域で今川氏と対峙するが、これと平行して北関東への進出を企てる。利害が一致した武田・北条間で天文十三年(1544)、甲相同盟が結ばれた。

駿河国河東を失う

第二次の河東の乱で敗れた今川義元は、天文十四年、占領された東駿河を奪還すべく、山内、扇谷両上杉氏と連携して、軍事行動を開始する。北条氏康は駿河に急行したが今川勢に押されて三島に退却した。さらに長久保城(現・静岡県駿東郡長泉町)を攻略される(第二次河東一乱)。

北条氏の守る河越城は、氏康の義弟・北条綱成で、約三千の兵で守備していたが、連合軍の山内憲政は城の南に陣を張り、扇谷朝定は城の北、などが陣をしき、三方を包囲する。

挟み撃ちに苦しんだ氏康は絶対絶命の危機に陥った。今川義元との和睦を模索し、幸いなるかな、その年十月下旬、武田晴信の斡旋によって、停戦が成立した。十一月、北条氏は長久保城を今川氏に明け渡す。

約八千の兵を率いて河越城に向

上杉方は戦意が低下、軍律も弛緩していたことを見抜いた氏康は奇抜な戦術を試みる。使者を申し出たのは、救援軍の福島勝広(北条綱成の弟)だった。彼は単騎で上杉連合軍の重囲を抜けて河越城に入り、兄の綱成に奇襲の計画を伝えた。

氏康の大胆・狡猾な作戦は

上杉軍に対して偽りの降伏を申し出て、詫言状を出し続ける、といった旗指物としていたもので、その旗色から「地黄八幡」と称えられた。「直八幡」の発音に通じるため「自分は八幡の直流である」というアピールであった。なお、綱成の「地黄八幡」の旗指物は現在、長野県長野市の真田宝物館に現存する。この機を捉えて打つて出ると、足利晴氏の陣に「勝った、勝った」と叫びながら突入し、既に浮き足立っていた足利軍も散々に破られて古河へ遁走した。連合軍の死傷者は一万三千〜二万六千人と伝えられている。

河越城を包囲した連合軍は...

約八千の兵を率いて河越城に向かった氏康は、河越城へのルートを確認するため、扇谷山内氏に仕えていた太田資顕に工作した、といわれている。

氏康は奇襲を試みる...

長期にわたる包囲作戦に飽きて上杉方の戦意が低下、軍律も弛緩していたことを見抜いた氏康は奇抜な戦術を試みる。使者を申し出たのは、救援軍の福島勝広(北条綱成の弟)だった。彼は単騎で上杉連合軍の重囲を抜けて河越城に入り、兄の綱成に奇襲の計画を伝えた。

氏康の大胆・狡猾な作戦は

上杉軍に対して偽りの降伏を申し出て、詫言状を出し続ける、といった旗指物としていたもので、その旗色から「地黄八幡」と称えられた。「直八幡」の発音に通じるため「自分は八幡の直流である」というアピールであった。なお、綱成の「地黄八幡」の旗指物は現在、長野県長野市の真田宝物館に現存する。この機を捉えて打つて出ると、足利晴氏の陣に「勝った、勝った」と叫びながら突入し、既に浮き足立っていた足利軍も散々に破られて古河へ遁走した。連合軍の死傷者は一万三千〜二万六千人と伝えられている。

河越城を包囲した連合軍は...

約八万といわれ、上杉憲政(関東管領の山内上杉家)、上杉朝定(扇谷上杉家)、古河公方の足利晴氏、その他関東の諸大名は、天文十四年九月廿六日(1545年10月31日)、挙つて河越城を包囲したといわれる(関東の全ての大名家が包囲軍に参加し、参戦しなかったのは、下総の千葉利胤のみだったとも)。

四月二十日(1545年5月15日) 戸時代に伝承を記したもの、享保十二年(1726)、『新編武蔵風土記稿』な

一隊を多目元忠に指揮させて、戦闘終了まで動かぬように命じ、氏康自身は残り三隊を率いて敵陣へ向かう。子の刻、氏康は兵士たちに鎧兜を脱がせて身軽にさせ、連合軍に突入する。

この戦いの結果、当主を失った扇谷上杉家は滅亡し、敗走した関東管領の山内上杉家も急速に勢力を失う。一方、北条家は勢力圏を拡大し、戦国大名としての地位を固める。甲相駿三国同盟の締結により駿河今川家や甲斐武田家との対立に終止符を打つと、関東制覇を目指して越後の上杉家(長尾氏)や常陸の佐竹家、安房の里見氏との抗争を始めてゆく。

戦国時代へと...

関東公方としての足利家と、その執事となる関東管領の権威と軍力は決定的に失墜し、代わりに後北条氏をはじめとする戦国大名が躍進した。室町時代の枠組みは東国において消滅し、舞台は中京に移る。

戦いに明け暮れる戦国時代へと

戦いに明け暮れる戦国時代へと移行し、織田信長、豊臣秀吉の活動の時代から、徳川家康の江戸時代へと引き継がれる。

戦国時代へと...

関東公方としての足利家と、その執事となる関東管領の権威と軍力は決定的に失墜し、代わりに後北条氏をはじめとする戦国大名が躍進した。室町時代の枠組みは東国において消滅し、舞台は中京に移る。

戦いに明け暮れる戦国時代へと

戦いに明け暮れる戦国時代へと移行し、織田信長、豊臣秀吉の活動の時代から、徳川家康の江戸時代へと引き継がれる。

戦国時代へと...

戦いに明け暮れる戦国時代へと移行し、織田信長、豊臣秀吉の活動の時代から、徳川家康の江戸時代へと引き継がれる。

1546	1545
天文15年	天文14年
河越夜戦で北条氏康が勝利する	
両上杉連合軍が河越城を包囲する	

「市民フォーラム」の活動

「市民フォーラム」は、地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

読者の「オピニオン」(意見・感想)をお寄せ下さい。

TEL 090 (3048) 5502

編集部原宛にどうぞ